

尊厳死

吉永 馨

いのちの大切さは誰でも知っていますが、いのちの尊厳という考えは余り重視されていません。尊厳とはどういうことか。それさえ明確に認識されていません。平穏な日常生活においては、そんなことを考える必要がないからです。

しかし、がんなどの重い病気にかかった時、生と死の問題が身に迫り、このことを考えざるを得なくなります。いずれ避けられない死なら、その瞬間まで、痛みや惨めさや見捨てられ感などに悩みたくない、人間としての矜持を保ち、人からも一個の人間として尊重してもらいたい、と思います。これが尊厳なのです。

マザーテレサは、瀕死の行き倒れの人を収容して介護しました。その人はテレサに大事にされ、言葉を出す力は残ってなくても、目で感謝して世を去ったといいます。マザーは言います。人をもっとも苦しめるものは病気でもなく、飢えでもない。それは見捨てられ、顧みられず、人間性を失うことです。

ガンなどで死期が近付き、しかも激しい痛みを苦しんでいるとき、医師に死なしてくれと懇願することがあります。家族もそれを理解し、一緒に医師に願う場合、医師はこれに応ずべきでしょうか。これは「安楽死は是か非か」という議論ですが、一般には非とされています。しかし是とする国があちこちにあります。スイス、ベルギー、オランダ、アメリカではオレゴン州などです。最近、是とする国が増えつつあります。カナダでは法的に認めているか分かりませんが、先日来日したオタワの病院では認めていました。

これとは別に、日本の尊厳死協会では、ずっと以前から次のようなリビングウィル(living will, 生前に発効する遺言)を書いています。

「自分が植物人間になり、意識が全くない時、3ヶ月は回復に努めて下さい。3ヶ月たっても回復しない場合は、延命治療を止め、死なせて下さい」。

治療を中止すれば死にます。しかし家族や医師は、胃ろうなどから注入する栄養を中止すれば餓死しますので、中止しにくいのです。リビングウィルがあってもなくても、中止することができず、数年間も延命治療が続くケースが沢山あります。そのため、延命をやめるべきだとする意見がだんだん強くなっています。今後の重大な問題だと言えましょう。